

病苦がまるで嘘(うそ)のような安らかな死に顔だった。二〇〇一年七月、ミラノの鍛冶職人レーモ・エルの告別式。一番弟子だった広瀬満明(55)はその日、仕上げたばかりの鉄の十字架を柩(ひつぎ)に納め、静かに祈りをささげた。

ミラノ近郊の閑静な住宅地ビオルテッロ。広瀬は一六四〇年に創業した歴史的な鍛冶工房「ジェネジオ・フマガリ」のオーナーだ。昔から農耕が盛んで、この

## ドキュメント 挑戦



工房での広瀬さん

もらえない。「一度も教わったことがない。技は見て盗め。すべて見よう見まねで習得した」。

れてなくなった台座を考案を切り、周辺を掃除するなると。時代を推定し、それほど汗を流した。新入りの広瀬は先輩か

知らない」。レーモもそんな広瀬の実直な人柄と熱心な仕事ぶりを見て、一目置くとようになった。八一年に転機がやって来た。経営者が死去し、後継者がいなくなったのだ。あつて見よう見まねする者など散り散りになった。レーモも弟の板金工房に移った。「誰も継ぐ者がいなくなったら、十七世紀からの工房の灯が消えてしまう」。広瀬は遺族から工房を引き継ぐ決意をした。仕事上ではレーモとライバルになったが、二人の交流は続いた。バルルなどで酒を飲みながら、鉄の加工の仕方について助言を受けた。「レーモがいなかったら今の私はない。今でも心はつながっている」

## 伝統工房のオーナーに

工房で牛馬の蹄(ひづめ)や農耕具の生産を手掛けていた。今でも隣は牛舎だ。

紡ぎ出すのは想像力をかき立てる楽しい作業だ。もともと自動車デザインを

ら、しばしば洗礼を受け、ある日、鉄片に穴を開けると命じられた。脇のポール盤に手を置くと突然、強い衝撃が体を突き抜けた。感電するように細工さ

工房内は使い込んで鈍く光る金床や鉄切り、溶接具、ポール盤などが並び、目下、製作するのは唐草文様の扉。デザインも広瀬が考案した。鉄は重くて硬い。正確に加工するのが難しい。

ーを指してイタリアに渡航した広瀬は一九七三年、知り合いの紹介で同工房にやって来た。腕っ節の強そ

た。ある日、鉄片に穴を開けると命じられた。脇のポール盤に手を置くと突然、強い衝撃が体を突き抜けた。感電するように細工さ

が好きでない。「私が作っているのはあくまでも商品。客が喜んで、かわいがってくれるものを作れば本望です。そんな温かみのある商品を作りたい」。最後までものづくりの裏方に徹する覚悟だ。|| 敬称略

「そこに魅力を感じる」工房ではアンティークのネチアン・ガラスの照明具。ガラスの文様から、今は壊

「そこに魅力を感じる」工房ではアンティークのネチアン・ガラスの照明具。ガラスの文様から、今は壊

直面したのは厳しい徒弟制度。最初は声すらかけて性格だから、手の抜き方を

|| ミラノ || 小林明